新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

村高

題字　宮　絢子

2009.5.15　第20号
発行人　本間勝治
編集人　大滝　修
事務局
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎044(953)8368

青春アーカイブス 村高

2009 関東支部 同窓の集い ご案内

早いもので我が村高は来年で110周年を迎えます。故郷村上では新緑の季節になり、新学期が始まり日光浴遠足が懐かしく思い出されますが、同窓生の皆様、如何お過ごしでしょうか。

22回生が一生に一度の「同窓の集い」の実行幹事の大役を任され、昨年10月に数十年ぶりの同期会を開催し、実行委員会を立ち上げ2009年同窓会総会・懇親会の準備をしてまいりました。

今回、関東支部同窓会役員の皆様に寛大なるご理解を頂き沖縄エイサー演舞、唄三線ライブ、沖縄物産品の出店と、村上の伝統以外の今までにないアトラクションを企画しております。そして一人でも多くの方にご参加いただくことを願って趣向を変えてみました。これを機に23回生以降の卒業生の参加を切に希望しております。後輩の皆様、これまで諸先輩方の皆様が引き継いできました村高の伝統継承者の一員になりませんか。

総会・懇親会のご案内状をお届けしておりますが、あて先不明により送り返されてくるのも多くあります。もし皆様のお知り合いがいらっしゃいましたらお誘いの上ご参加いただければ幸いと存じます。

会場にて皆様をお待ちしております。

会　長　本間　勝治
実行委員長　美濃　忠三
新制二十二回　実行委員一同

○とき
平成21年6月20日（土）
受付開始　正午より・午後1時開会

○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町6－6
電話03（3234）8739
JR（中央線・総武線）
四谷駅前（麹町口）
地下鉄（丸の内線・南北線）
四谷駅

○会費
・男女とも　8千円
・平成17年～20年卒　4千円
・新卒者(平成21年卒)　無料

※会場準備の都合上、5月30日(土)迄に出欠のご返事をお願い致します。

2008のつどいから

同期会だより

14回生　皆が元気!!

佐藤　勝（新制14回卒）

毎年の年賀状でご挨拶伺いをしている村高の恩師、卒業時の担任でもあった吉田牧夫先生の賀状に「私も今年は80歳を迎えることになり…」とあり、少々驚きました。

我々がお世話になった時は確か30歳前後の新進気鋭の先生で、放課後も水泳部を熱心に指導していたバイタリティー溢れる若い先生だったのです。しかし良く考えてみると我々も既に65歳になっており、あれから50年が経っているのです。本当に月日が経つのは早いものと改めて実感させられました。

我々37年度卒業の14回生は頻繁に同期生の会合を持っています。学生時代に体操部で活躍していた菊地秀雄・目黒満の両氏が主体となってマメに面倒をみてくれているのですが、新年会・忘年会はもとよりお花見や誰々を励ます会など、何かと口実を設けては集まり大いに飲み語っている次第です。

そして会の名称も「ゆーかり会」とし、村高出身者だけでなく同じ時期に村上で育ったゆかりのある仲間の集まりとしてからも早10年が経っており、会長は新発田商業に進んだ小町の益田本屋の益田正史さんがやってくれています。

毎年大きなイベントとして幹事交代制による会合や旅行なども楽しんでいます。地元の村上にも仲間が沢山おり、夏には粟島に渡り、若い時と同じく海に潜る「鮑・サザエを食べる会」を持ち、東京からも何時も数人が参加しています。

一昨年は20人で熱海の初島に行きバンガローに泊まる楽しい時を過ごし、昨年の春には関西との交流会が持たれ、京都旅行を楽しんできました。東京からは男性10名、女性15名の参加で、我々を出迎えお世話してくれた仲間は8人、夜の宴会だけ参加という人もあり大変な賑やかさでした。往復の新幹線の車中では全員がまるで修学旅行気分であり、嵯峨野・

嵐山などの散策では50年前に旅行したと同じ場所に立って、あの時はああだったこうだったなどと昔に戻って大はしゃぎです。静かな由緒あるお寺見物ではお坊さんから「皆さん、少しお静かに」と注意を受けてしまう始末で反省しきりでした。

冒頭の吉田先生の「80歳をお祝いする会」を今年のお盆に村上で計画しており、また沢山の同期仲間が集まってくれるはずです。この様に楽しい同期会を多くやっている我々14回生ですが、関東支部「同窓の集い」となると参加者が少なく、支部の役員を仰せつかっている私としては多少心苦しいところがあるのです。

（東京・西東京市在住）

前期高齢者　皆、意気軒昂

佐野　清克（新制15回卒）

一、りんご村から

平成20年11月22日（日）、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷（私学会館）で、関東在住の全15回生が同期会を開催しました。その折、長野県高山村から駆け付けていただいた宮川正康君（4組）は、自家製のリンゴの紹介を行い、出席者の求めに応じて多くの注文をとりつけました。「今年は好天に恵まれ、順調に育ちました。春は温暖で適度に雨が降り、7～8月は高温少雨、盆すぎに冷涼多雨、『最近では珍しいくらいのリンゴ陽気』味も玉の伸びも良好で《蜜》の入りも良く、今年もおいしいリンゴに仕上がりました。」（信州高山発宮川農園だより）

ここまで育てることには大変な苦労があったことと思いますが、しかし、同期生たちは、家庭用や贈答用にたくさん注文し、中には、来年以降もお願いしたいという方もいました。

何週間か後に、我が家にも注文のリンゴが届き、早速頂きましたが、とても美味しく、家族にも好評でした。さっぱりとみずみずしく、そして実に甘い味がしました。

二、同期会の開催

全15回生が同期会を開催したのは、6～7年前です。旧3年1組の尾崎茂君（剣道部、関東支部幹事）、松沢正君（卓球部）や佐野が、毎年開いているクラス会のほかに、同じ学年でも集まってみようかという話になり、今回と同じ私学会館で、関東在住の同期の方々に呼びかけたのが始まりです。

以後、毎年各クラス持ち回りに幹事を担当し、2クラス合同の幹事の年もあり、今年で7回目です。幹事が変わると雰囲気もまた変わり、いろいろな趣向を凝らし、毎年大体20人から30人ほどが参加しています。

昨年の案内状には「還暦を過ぎ、はや4年目を迎えておりますが、月日の経つ速さを感じております。さて、昨年の同期会は7組の皆さんのご努力により、盛大に行われましたが、今年は各組持ち回りが一巡して、また1組が担当することになりました」と通知しています。幹事の担当クラスはそれなりに大変ですが、我が1組は、尾崎、松沢両君のリードと実務により何とか開催に至りました。当日には、前述のリンゴの話や、各組のスピーチなどを挟み、3時ごろまで続き、さらに場所を7階に移して、やや高いところからの眺望まことによく、窓外の青空と市ヶ谷、四谷界隈と内堀を眺めつつ2次会となり、予定外のカラオケとなり、大いに盛り上がり、最後は舟木一夫の「高校3年生」などを合唱し、来年の幹事の2組代表小薬稔君、嶋田圭次君等にバトンを渡し、散会となりました。

三、全15回生の同期会

全15回生は、昭和38年3月の卒業です。翌年の39年は新潟地震、東京オリンピックの年で印象が深いのですが、この年は、米国のケネディ大統領が暗殺された年です。また横綱大鵬が活躍していました。昭和37、38年と実質経済成長率が8・3％、8・6％（近代日本総合年表、岩波書店）と信じがたい成長の時代でした。今年15回生は65歳になります。はやりの言葉では前期高齢者だそうですが、その割には皆意気軒高です。これからも、同期生の賛同が得られる限り、この同期会は長く続けたいものと思っております。

（東京・西東京市在住）

思い出エッセー

あの日　あのこころ　いまじぶん

フランスの旅を思い出して

船山　泰三（旧46回・新制1回卒）

平成元年暮れから翌2年にかけてのことです。

当時某商社勤めの息子が北アフリカに駐在していたとき、正月休みにはアラブ地域から出てフランスで過ごしたいのでパリで会おうとの誘いがあり、家族全員パリに渡りました。

シャンゼリゼの賑やかな街路、ノートルダム寺院の荘重な建築、ヴェルサイユ宮殿の華麗な装飾等々に目を見張るばかり。見るものすべて建築技術の高さに魅了された思いです。

初日からパリ市街の整った家並みが美しく眼に入り羨ましい思いに駆られました。高さ制限があり構造も統一されていると聞いていたので、住宅地域でも高層ビルの乱立が目立つ日本でもそのような政策がとれないものか願望がよぎります。

2日に亘ったロワール地方の古城巡りにはいっぱい思い出が残りました。

フランス西部を流れて大西洋に注ぐロワール河の流域は、風光明媚、気候温暖、四季折々の花や果物、野菜など産物が豊富で、フランスの庭と言われている地域だそうです。ワイン名産地の一つでもあり、羊が群れをなして草を食む牧歌的な情景もあちこちに見られます。

快適な別荘地とも言われるだけに、15世紀から16世紀にかけて王侯貴族によって建てられたという城館が数多く点在し、イタリアから移入された初期ルネッサンス様式のものということですが、それが立派に保存され、建築文化の重みのようなものを感じました。何ヶ所かバスを降りて見学し、英語によるガイドさんの説明を聞き、断片的ながら子供達に訳して貰ったり、案内書を読んだりしているうちに、忘れていた西洋史の復習をしているような気分になりました。

私達の一行は1台のバスで約20人、そのうち日本人は私の家族5人だけ、他はアメリカ人、カナダ人、イスラエル人、チェコスロバキア人等で、外国人は皆共通の英語で語り合い、食事時には同じテーブルを囲んで和やかにお喋りしているのに私と家内だけはまるっきり会話に入って行けず、聞こえない所に置かれている思いです。時々子供達を介して話をして見たけれども話題が続きません。やはり或る程度でも英会話ができたら外国旅行はずっと楽しいでしょう。

1か月もかけてヨーロッパ各国を回ると言っていた家族もありました。羨ましい話です。

古城めぐりの旅を終えてパリに帰ったのは大晦日の夜。シャンゼリゼ通りにはイルミネーションが輝き、新年を迎えようとする市民で賑わっていました。ワインボトルを傾けながら歓喜する若者が大勢集まっています。

長い歴史の中で何度も戦争や紛争に翻弄されて来たからこそ、平和の裡に新年を迎える喜びが心底から沸いて来るのでしょうか。

僅か2日間のツアーで知り合っただけの異国人が別れ際に「Ｈａｐｐｙ　Ｎｅｗ　Ｙｅａｒ！」と言葉を交わせるのも平和であればこそ――平凡な表現ですが率直な感想です。

明けて元旦。日本食の店でおせち料理を注文。

昨日までのような緊張もなくビールで乾杯。

数々の思い出のほかにも、帰国後ワインに親しめるようになったことも大きな収穫でした。年齢をとっても長く嗜めるのが嬉しいです。

（千葉・千葉市花見川区在住）

故郷の東京を離れて

大竹　茂久（新制4回卒）

私は、東京の下町生まれである。荒川区三河島で生まれた。今年で76歳になる。国民学校6年生の時に国内の戦禍が激しくなり、集団疎開で福島県田村郡船引町に兄弟4人で行くことになった。

この疎開は国の政策で、都会地の学童保護として学校ごとに地方の農村・山村へと半強制的に行われた。総勢３００名位の移住であった。地元の旅館7軒を寮として、学童40名ずつが分散し宿泊した。親元を離れ、宿泊を開始してから3日たった朝方、どうも下級生の様子がおかしい。各部屋の隅で2～3人ずつ寄り添って泣いているのである。

父母や兄弟から離れ、東京恋しさに泣いているのはすぐわかった。何か自分にも心に感じるものがこみあげてきた。環境の急変について行けないのだ。

すぐ宿舎担当先生の下命が飛んだ。「6年生全員集合、郡山方面と平方面に分かれ探索開始！」と。

私は一人で郡山方面へ線路を伝って小走りに探索を開始した。50㍍ほど離れて隣の宿舎の先生が後部からついてきた。トンネルに入る前で、先生が「大竹君、君は寮に帰っていいぞ」と声をかけてくれた。その後、各宿舎の先生方からは、脱柵についての叱責も注意事項もなかったそうである。

9月になって大滝根川の河原で疎開学童の写真を撮ったが、写真を見ると肥満児は一人もおらず、がらがらに痩せた児童ばかりであった。現今の児童とは比べものにはならない。丁度、終戦の詔勅の日に、仙台へ行き、幼年学校への試験を受けた学友は、試験官から「都会っ子は駄目だ。痩せこけて採用できない」と言われたそうである。このことは、8年後に級友と再会した時に聞いた。

卒業式は東京の母校で行うことになり、6年生だけが帰郷することになった。学校へ直行し卒業式の最中に空襲警報が鳴り響いたので、すぐ解散となり、コッペパンと四分の一のワラ半紙にガリ版で印刷された卒業証書を渡されたので、家路へ急いだ。

家には誰もいなかったが、玄関脇の8畳の壁際に位牌と遺骨があり驚愕した。父か？母か？兄か？

しばらく放心状態でいると、母がどこからか帰ってきた。『誰が死んだの？』と息せき切って聞いた。

兄ちゃんが死んだことが判った。右膝関節が結核菌に侵され、有効な薬のない時代なので全身が衰弱し他界したのである。

金屋村の母の実家に疎開するまで、4箇所に移住し母の実兄からの連絡を待った。それから母の実家のある金屋村に疎開したのである。母の兄からの承諾の手紙が届くまで、4か月も経過した。

（東京・豊島区在住）

加齢と共に馳せる望郷の念

大滝　正次（新制8回卒）

古今和歌集に「今日の風やとくらむ……」と春を表現する一文を見ることが出来ます。

自然界の摂理から言えば、確かに春は春なのですが、春爛漫と浮かれられるにはほど遠いのが、今の世情ではないでしょうか。

ところで、郷里の春に思いを馳せれば、4月、5月の声を聞けども、朝夕は何故か肌寒く、これが春なのか？と感じるのは小生だけだろうか。

とはいえ、春はゆっくりと冬から春へと移行するのではなく、いっ気に到来して来るように感じます。齢いを重ねるごとに、気分も体力も衰えて来るからこそ、季節の感覚までも鈍って来るのでしょう。

だが待てよ。センチメンタルになっていては負けてしまう。マラソンや駅伝、その他のスポーツもそうだが、勝負どころは中間点を過ぎたところです。

人生の折り返し点は65歳。この中間点を過ぎてからが、充実してくる。即ち、老いを楽しみながら、力を発揮出来るのだとか……。

そうです。85歳の英米文学者である外山滋比古氏の著書「老楽力」で主張している通りだと思います。

人はどの様な瞬間に、郷里の事や友人・知人の事を思い浮かべるのでしょうか？

融雪、蕗の薹、春一番、菜の花、梅、桜、卒業式、入学式、入社式等々、人それぞれで思い出、考え方には違いがあるでしょうし、住む場所によっても、千差万別だと思います。

ともあれ、あ～だこ～だと言っていても、50有余年も東京に住む小生、コンクリートのビル街、アスファルト地面では、自然な四季の移ろいを敏感に感じ取るには難しいものがあります。

でも、何事にも代え難く春を感じるのは、年一回あの人この人、あの顔この顔、友との再会。そうです。「村高」関東支部同窓の集い、そのものです。

吹く風は冷たいものがありますが、それは冬の寒さではなく、確実に春が来たことを教えてくれます。

新約聖書に、使徒パウロがコリント諸島の信徒に送った手紙に「なつかしい、うれしい、お便りをありがとうございました。例え私たち〝外なる人〟は衰えていくにしても、私たち〝内なる人〟は、日々新たにされていきます」と言う一節文がありますが、加齢と共に、高校に通った3年間の思い出と重なり合って、走馬灯のように脳裏をかすめて行きます。

思い起こせば、まだ戦後の喧騒さめやらぬ1953年（昭和28年）に入学。それまでは幼稚園から小学校、中学校とまさに村上の町中しか知らない、井の中の蛙そのものでした。

それが一変。カルチャーショックを受けました。育った土地も、住む環境も違うところから汽車やバス、自転車等々で通って来る同窓諸氏との出会いには、感動を覚えたことを思い出します。

それに、忘れられないのは恩師です。何も分からず右往左往するばかりだった小生たちを、3年間やさしく導いていただいたことが、大きな礎となって、今日に生きていることです。

級友は勿論、クラスの別なく語り合える友がいたこと等々。有意義な高校生活を過ごせた事、感謝、感謝。大きな宝物となって心に残っています。

同窓の皆さん。いつまでもお元気で、そして再会を楽しみにしています。（東京・東久留米市在住）

故里がもたらしてくれたボランティアと健康

小川　稲子（新制9回卒）

私は、これで故里の事について書くのは、二度目となります。前回の時は「私を育ててくれた故里」でした。私が70歳の現在思う事は何時の時代も心の中に、岩船郡黒川俣北中と村上町で生まれ育った18年間が、その後の生きる支えになった事は確かです。

私の70年間の人生は、必ずしも平穏無事ではありませんでした。でもお金に恵まれてはいませんでしたが、心の豊かさを育んでくれた故里は、私を勇気づけてくれました。私は北中で生まれ、中学1年の途中まで育ちました。それから村上中学、村上高校と6年間近くを村上町で過ごしたわけです。

この18年間の学校生活の中でも私の家庭には、どんどん変化が起っていたわけです。

私もようやく就職が決まり、東京に出る事になりました。運良く日本水産と言う水産会社の事業部捕鯨課に配属が決まり毎日が新鮮で刺激的でした。1年間やっと仕事に慣れ楽しくなって来た時に、総務部に行くように命じられ受付に配属となりました。私としては、少々不満でしたが、受付は会社にとって大事な場所で、受付の応対如何でその会社の様子が分かると言われるくらい、受付は会社の顔になる場所なのだからと説得されました。

田舎育ちの私が東京・丸の内の東京ビル5階で、沢山の企業戦士と向き合い接客応対する事で私自身社会人として成長して行きました。

2年後私は、秘書課に命を受け専務の秘書となりました。女子社員としては大出世です。専属の秘書室に一人で事務机に座り来客の一人ひとりに応対して専務に取り次ぎ、お部屋に通すか通さないかを判断する事も仕事の一つでした。こうして私は5年4か月の会社生活を終え結婚致しました。私は会社勤めで一段と成長しました。私が社会人として仕事をしていくうえで、故里の自然の中で培った心の豊かさと人との結びつきで育んだやさしさと思いやりの心が大いに役に立ったと信じます。

家庭を持ち、子供を育てて行く中で、新たに地域と関わる事になりました。

今迄の経験が地域で生かされるのです。子供の幼稚園、小学校、中学校とPTA活動する事になりました。息子が小学校2年生からボーイスカウトに入りましたので一緒に活動しているうちに親の会育成会のお世話。子供が学校を終えると地域の団体の活動が待っていました。千葉市青少年補導員、青少年育成委員会、これらは青少年に関係する団体です。その後、地域コミュニティの運営委員、今は高齢者関係の千葉市社会福祉協議会の委員、青少年の健全育成のためのマラソン大会、千葉市が奨励している花の町で、チューリップとコスモス、菜の花を幼稚園、小・中学生と一緒に4千㎡の土地に花畑作りを行っています。他に地域の老人ホームの入所者の行事の時に付添い、独居老人の配食サービス等々これ等の事は全てボランテアとして行っています。これまで色々書きあげて来た事は、私が30歳になってから、70歳の今でもまだ続けている私の生き方です。

私がこうして元気にボランティアが出来ているのは子供の頃、北中で食べていた季節の食物と外で野や山や川で遊んだ思い出、田植え、稲刈り、畑の芋掘りの手伝いで地域の大人と触れ合う事が出来た事が身体中に染み込んでいるからだと思います。

ここへ来て学校教育の中に、食育が大切と言って居ります。健康な身体を作るためには子供の頃からの食べ物が関係している事は言うまでもありません。幸い私は親が健康に育ててくれました。これからも、元気でいる限りボランティアを続けて行きたいと思います。それが逆に元気をもたらしてくれると信じています。

（旧姓＝大滝、千葉・千葉市緑区在住）

ふるさと、そして舞台朗読

萩田　こうこ（新制12回生）

私の兄は、寺町にあった映画館「松竹」に映写技師として働いておりました。今から50年ほど前のことです。小学生の私は、放課後毎日のように兄と「松竹」で過ごしていました。

2階の映写室は8畳ほどの広さで、フィルムを回す兄の傍にはいつもSさんが、次週上映予定の看板を作っていました。当時、宣伝用のポスターはほとんどが手書きです。無声映画時代弁士だったというSさんは、絵もほんとうに上手で、スターの似顔絵が驚くほどそっくりに仕上っていきます。

隣のスタッフ用の小部屋には、観客席を見渡せる小窓と館内放送用のマイクが1本。学校で放送委員だった私は、おねだりをして、ほんの二、三度ですが、次週予告のアナウンスをしたことがありました。恥ずかしい限りです。

私はその小さな窓から、スクリーンに映し出される映画を、毎夜、飽きもせず見続けました。今思えば、小津安二郎・木下恵介・黒沢明など巨匠と呼ばれた監督の描く映画の世界だったのです。私はどんどんその世界に魅せられていきました。モノトーンの暗い画面に繰り広げられる大人の恋に、幼い胸をときめかせながら……。

〝総天然色〟となったのは、それからまもなくの

ことでした。

映画館に入り浸りの私を、不良少女になるのではと心配した担任の先生から注意を受けるというおまけがついてきましたが、私の「松竹」通いはその後も、兄が転職し上京するまで続いたのです。

のちに、老いた映写技師と少年のふれあいを描いた洋画「ニューシネマパラダイス」を観て、その当時のことがオーバーラップし、せつなく思い出されて、私にとって忘れられない映画となりました。

そして今、私は「舞台朗読家」として、ステージに立っています。

「舞台朗読」では、文学作品を本を持たずに忠実に朗読するのですが、語り手の感性と僅かな所作が加わり、不思議な世界を醸し出していきます。作品の行間に秘められた真実や葛藤を感じとり語り演じていくことの楽しさと、演者と聴き手の異なる感性とが触れあう喜び。そこには決して映画のスクリーンのような華やかさはありませんが、私の中に眠っていた魂を揺さぶるのです。

「〝こうこの夢語り〟(私の公演時のタイトル名です）は一人芝居のようだ。登場人物や場面が浮かんでくる」とは、私の舞台を見てくれた方の感想です。

遠い昔、松竹館で見た数々の名画のシーンは、私の胸の奥底に生き続けていたのでしょうか。私の感性を育ててくれたのでしょうか。

数年前、むらかみ古民家倶楽部と村上中学同級生のご支援のもと、由緒ある割烹〝新多久〟の大広間で（惜しいことに当時の建物は焼失したと伺いました）村上の皆様に語りを聞いていただく機会を得ました。

劇場公演、学校、生涯教育センター、そして煌（きらめ）いて（私の主宰する教室です）での指導と、様々な活動を続けていますが、念願のふるさと公演は、また一つ私に新たな力を与えてくれました。

公演当日、東京から駆けつけてくれた兄もすでに亡くなりましたが、ふるさと村上は、映写室から放たれたひとすじの光の帯とともに、私の脳裏に眩しく鮮やかに刻まれているのです。

（旧姓＝石井公子、東京・小平市在住）

『天・地・人』

渡部　和子（新制13回卒）

大河ドラマの『天・地・人』を夢中で観ています。

母の実家が六日町（魚沼市）で、夏休み中遊び回っていた坂戸、叔母達と行った雲洞庵（※1）。与板に住んでいた頃、街の人が直江様、直江様と尊敬の意味を込めて呼んでいたこと。母の口からよく出る長尾様、西脇、高半という単語。

そして良寛様、小和田家雅子様へと続く不思議。すべて解決した思いです。

深い雪に包まれた思想。義の心、和の心。

山古志とは古い山の志とか。語り継ぐ尊さ、形のない尊さ。使えば使う程光り輝く堆朱。

故郷は宝の山と言った友達。ＮＨＫに受信料を払った甲斐がありました。

又、楠正成（※2）の子供を匿って来た母の実家に興味津々の次男一家。何と2歳のチビまで連れて本家（今成薬局・漬物屋）へ行き高半の駒子の資料館まで眺めて来たそうです。

迷惑かけるから行っちゃダメと言ったのに。逆に大喜びされ、おみやげにおいしい奈良漬（※3）まで頂いて来たとか。

若いパワーのおかげで私も知らなかった本家の建て替えの話。もう倒れると思ってもなかなか倒れず、よくよく見ると柱の下に臼が埋まっていたとのこと。今の免震ですネー。

建築士の長男はそれを聞き目も口もアングリ。彼も行くなと言っても行くでしょうね。

何しろ車庫の上からおしっこしたり、気に入らない先生の椅子を引いて校長先生に呼び出されたりした子でしたから。

千の風になった御先祖様が笑っていると思うと私は身の置き所のないこのごろです。

※1、2＝ちなみに雲洞庵の姓は南木です。

※3＝一折１８００円からで、私は近所の方とまとめて注文しています。送料は百円から2百円位におさえられます。金糸漬は女性向きです。ＴＥＬは０２５７－７２－２１０５です。

（旧姓＝林、茨城・ひたちなか市在住）

出会い、還暦、セカンドライフ

山下　治郎（新制19回卒）

私たち新制19回生は昭和23年と24年生まれです。昨年と今年で還暦を迎えました。と言うことは定年退職の方も多いと言うことです。

私自身の人生を振り返ると、村上高校を卒業して東京ではなく北の地、弘前大学に進学し、青森県に中学校教員として就職しました。それが訳あって昭和48年に埼玉県に転居し中学校教員を続けました。それから関東での暮らしが36年間になりました。

新潟県、青森県という雪国住まいで埼玉県に越してきたばかりは雪の降らない冬が有り難いのですが、どうしてもなじめず。秋が来ていつの間にか春になるけじめのない？季節の移り変わりでした。また朝夕は新潟並みに寒いのに日中のぽかぽか陽気に誘われて昼休み、生徒達とサッカーに興じ汗びっしょりになり、さらに乾いた西風でのどを痛め、よく風邪を引きました。

関東の味にもなじめず村上よりお味噌を送ってもらったりしていました。やがて関東の生活には慣れましたが村上の塩引き鮭だけはいまだ毎年年末になると送ってもらっています。我が家では、この鮭を焼いて12月31日の大晦日は村上式の御馳走を並べて、御神酒をあげて、お年夜を行っています。

大学が青森県であったこと、2年間青森県で働いていたことで埼玉県に住んでも同級生や先輩とも交流が無く仕事の忙しさを理由に村上の実家からも足が遠のいていました。

そんな中で平成17年、村高新制19期生で同窓会をやろうとの葉書をいただき、ひょいと参加したところ40名近く集まりました。昭和42年に村高を卒業ですので39年ぶりの再会でした。名簿にはさらに名前があり関東には沢山の同期生がおられ活躍をしていることを知りました。その時の幹事役の安冨さん長坂さんから、この同窓会開催にあたっては村上高校同窓会関東支部の援助が有ったと言うこと。次の年19期生が関東支部総会開催の幹事役を仰せつかっていることのお話しが有りました。卒業後40年目に同窓会総会運営の幹事学年になり故郷を離ればなれになって関東に散らばった同期生が集まる。どなたが考えたのか素晴らしい企画ですね。同期会では総会運営の実行委員長を決めることになり。高校時代生徒会副会長をやっていたと言うことでみんなが手伝うから山下やれ！となりました。宣言通り総会の運営では19期生一丸となって運営を行うことが出来ました。

あれから3年たち最初に書いたように、去年は還暦を迎えました。私は教員ですので誕生日ではなく今年3月に定年を迎えました。少し暇が出来たところで豊かなセカンドライフの人脈と今まで働いてきたご褒美に豪勢に19期生の同窓会を行おうと言う話が進んでいます。19期生のみなさんお仲間を誘ってぜひ参加してくださいね。　（埼玉・幸手市在住）

故郷、そして同窓の縁

遠藤　きみ子（新制21回卒）

高校時代から早いもので、もう40年も経ってしまいました。というよりは、気がつけば40年が経っていたというほうが当たっているのかも知れません。

私の高校時代は、自転車通学で毎日8キロの、当時は砂利道を往復したものでした。

1学年が11クラスもあったので、教室がなく小体育館を仕切って使っていた時期です。冬はバス通学でしたが、道路が狭くなり、よく遅刻を余儀なくされたものでした。今は湧水ポンプで市街も道路は雪がないようです。卒業間際、社会に出るにあたり、新潟出身者なのだから「佐渡おけさ」と「相川音頭」を踊れるようにと教えてもらったことがありました。村高ならではのことでした。

最初、新潟に勤めたあと、私が上京してきたのは昭和45年2月3日のことで、夜行列車でした。その日は猛烈な吹雪で、国道にはトレーラーが何台も横倒しになっていたのを覚えています。それから、夜学に通いながら、東京都の職員採用試験を受け、当時、区への『出向』が出来たので、区職員としての採用試験を経て、現在に至っています。公務員として37年の月日がなんとか無事に過ぎたところです。入区して、新人職員紹介の広報紙が出たところ、職場に『村高出身者』が3人いると電話が入りました。もう退職された大先輩、都に異動された先輩と私でした。そういえば、38年ぶりに会った同期生の息子さんが、同じ職場にいることもわかりました。世間は狭いものです。

両親はまだ健在です。子供達が幼いときは毎年帰省していたものの、この頃はなかなか帰らずにいます。「親孝行したいときには親はなし」にならないよう、なるべく機会を作り、帰りたいと思います。

話は変わりますが、最近はキレる人が多く、そういったトラブルや事件が多いようです、育ちあがりの時期に何かが欠如しているのではないかとも思います。新潟県人は粘り強く、我慢強いとよく言われます。私は、加えて、村上の地で育った人はキレることはないはずと自負しております。それは、家庭、学校、友、教師、気候風土が調和し、私たちを育んでくれたからに他ならないと思うのです。私達を育ててくれた、海、山、川と三拍子そろったすばらしい自然環境に感謝、感謝です。今の子供たちの育ちあがりの環境が何とかならないものかと危惧しているのは私だけでしょうか？

1昨年、38年ぶりにお誘いを受けて、同期会に参加しました。恐る恐る会場に入ると、懐かしい面々がいました。そして!!なんと、会場の壁には、卒業アルバムの写真を引き伸ばし、集合写真に合わせて一人ずつ写真が貼ってあるではありませんか！

『私、この人』『オレはここ』と、学生の時の写真と57歳の今の人が大騒ぎ。面影の残っている人もいれば、殆どわからない人も…、まるで変わらず、そのまんまの人も……。

以来、総会の当番幹事だったこともあり、その打ち合わせを兼ねて、暑いといえば暑気払い、1年過ぎたといえばお疲れさん会、寒いといえば熱燗でたまには飲みたいねと……。

忘年会、新年会とかれこれ10数回集まって親交を深めています。また昨年、7月には村上に帰省した

友から「大祭のお囃子の音を聞かせてあげるよ」と職場に電話が入り、懐かしいお囃子の音が聞こえて来ました。なにより、それを聞かせてくれた友の気持ちに心を打たれてしまいました。

生まれ育った場所を共有していることのつながりなのか、不思議なほど解かり合えるのです。

私にとっては、ただただ感動の連続でした。これからも、仲良く励ましあいながら行きましょう！

また、総会の際に、わざわざ村上から駆けつけてくれた同期の人もいます。獅子舞や物販で地元の人も来てくれました。思えば、当日の朝は新潟で大きな地震があり、新幹線が遅れて、ようやく間に合ったのでしたっけ。なんとありがたかったか！本当にありがとうございました。

今年の関東支部の総会幹事は22回生に引き継ぎましたが、10月におこなわれる本校の総会では、21回生が幹事とのことです。関東支部からも応援に駆けつけようと皆で話し合っています。及ばずながら、応援に行きますので待っていてください。

（旧姓＝本間、埼玉・草加市在住）

アラ還の心境

美濃　忠三（新制22回卒）

先日テレビでアラ還と言う言葉を耳にしました。英語と日本語の合成語、アラウンド還暦。

つまり60歳近辺の人を言っているのだと分かり、自分がまさにアラ還なので急にこの言葉に興味を持つようになりました。

私の場合、人生は3部構成と考えております。

第1部の30年は、地元有明生まれ、村高を卒業、大学進学、就職、結婚、子供2人を授かり第1幕終了。

第2部の30年は、仕事中心の人生で、海外勤務が15年、国内勤務が12年、後3年で還暦です。妻からは海外生活が長かったのに、どこにも連れていってくれなかったと、事あるごとに愚痴られ、本人はいっぱい連れて行ったと夫婦喧嘩で第2幕が終わりそうです。

問題は、第3部の30年に何をしたいか今、一生懸命考えております。できれば60歳の定年と共に単身アメリカに渡り2～3年経済を勉強し、第3部の開始にしたい。

帰国後、今度は経営者として仕事をし、PPK（ピンピンコロリ）で最後の幕引きしたいと思いますが、旨く行くかどうか不明で、アラ還に近づくにつれ悩みは増すばかり。

アメリカで勉強すると言っても経済的、妻の説得など難問だらけで、最初から躓きそうで目の前が真っ暗です。

同窓生の皆さんに良い知恵を授けてもらいたいと思いますが、人をたよるようではだめと後悔しながらも、第1部、2部と同じ事を繰り返しそうで、どうにでもしてくれと言うのがアラ還の心境です。

（埼玉県・所沢市在住）

高校生活に思いをよせて

佐藤　利枝子（新制36回卒）

今年4月から長男が高校生です。長男と話をしていると、色々高校生活が思い出されます。長男はテニスに夢中で、部活にはりきっています。私の練習相手にと思って小学生の時にスクールに通わせたのが始まりですが、今も初心者の私は到底かないません。身長も体重もおいこされ、すっかり高校生の体格です。

私が高校の時はマネージャーにあこがれ、サッカー部のマネージャーになりました。でも人が走っているのを毎日見ていると、自分も走りたくなり、陸上部にはいりました。毎日毎日トレーニングをこなし、3年間で100メートル走も少しだけ早くなりました。主競技は走り幅跳びでしたが、これも少しは跳べるようになりました。苦しいのに毎日続いたのは先生やチームメイトとのつながりだと思います。苦しいけど楽しかったな～。

それと楽しかったのは1～3年各学年のそれぞれのクラスでの生活です。それぞれの学年で、色々な行事があり、みんなで取り組んだことが全部良い思い出です。いろんな人と出逢えたことも良かったです。一生懸命勉強して自分の希望大学に行った人、ちょっとワルに見えても実は心が優しい人、普通に勉強して普通の人生を歩んでいる人、誰もが良い友人だったと思います。今でもその時々の友人の励ましなどは、勇気を奮い立たせてくれます。

特に先生方との出会いは大切なものだったなと思います。先生方一人ひとりの思い入れがあり、人間としての成長に影響を受けたと思います。

長男が高校生になった今、そんなこんな思い出がよみがえってきます。色々高校で悩むことも多いと思いますが、今この時を大切に、高校生活をエンジョイして欲しいと思います。まだ将来何になるかは決めておらず、とりあえず部活と、大学進学を視野に入れての勉強をがんばる予定です。

私は中学の頃からなりたかった看護師の道に進み、現在は小規模の病院の介護保険療養型病棟で看護師を続けています。主に脳血管障害で、寝たきりや、やっと食事が自分で食べられるようなレベルの方々が入院しています。人手不足と医療費削減、介護保険の改定など、医療や介護を取り巻く環境は未だに過酷で、厳しいです。

毎日仕事に追われていますが、患者さんの日々のちょっとした変化が嬉しく、経管栄養だった方が口から食べられるようになったときなど、ほんとうに良かったと思います。それぞれの方には家族がいて、患者さんを大切に思う気持ちがあります。現在私の母も新潟で入院しているのですが、そばにいることが出来ずに残念です。その分と言うわけにはいきませんが、患者さんとその家族を大切にして行きたいと思います。

ところで、私にはもう一つ大切なものがあります。2年前から始めたクライミングです。人工壁オンリーですが、40をとっくに越えての体力は悲鳴をあげます。体力・筋力だけでなく、バランスやルートを見る力など、総合的な力が必要なのだそうです。でもこれが上達してくると凄い達成感で、どんどんのめり込んでしまいます。子供が私のテニスの相手をしてくれないので、最近はもっぱらクライミングをしています。仕事が休みの日にジムに行くので、回数はいけないし、体力はないし、新しい若い人にどんどん追い超されていきます。こんな競技が高校生の時に出会えたら良かったのにと思ってしまいます。高校の時は体が軽かったな～。時々子供を連れてクライミングジム（いつもとは違うところ）に行き、子供とも楽しんでいます。

いつまでも気分は高校の時と変わりないです。この趣味により、よりいっそう生活も仕事も充実していると思う今日この頃です。

（旧姓＝加藤、東京都・東村山市在住）

私の高校時代

立花　俊道（定昼11回卒）

私は、昭和31年に入学し35年に卒業しました。当時、定時制は昼間部1クラス、夜間部2クラスと、分校が坂町、高根、府屋にありました。昼間部は4月から12月まで8時始業。1月から3月までは9時始業で週3日及び週4日の1日離でした。月謝は600円だったと思います。

家業は煎餅屋で母と兄と私と祖母の4人で切り盛りしていました。毎日、朝4時に起き、夜10時まで仕事です。二、七の日は学校のそばの六斎市に出店していたので、授業のある日と重なると学校も休んだものです。だから学校へ行くのは休憩に行っているようなもので大好きでした。

農家の出身者は、朝一番に田起こしをやって来たとか、鶏300羽に餌をやってきたとか、又、浜の出身者は櫓漕ぎの船で網を揚げてきたとか、その疲れからか学校で寝ている者も居ました。冬になると朝日村の生徒達は自転車、バスが使えなくなるので、朝4時に起き、弁当を2つ持って集団登下校していたようです。近道のため、田んぼの中に真っ直ぐな道ができたものです。

私の得意科目は、数学です。菓子類は量り売りか数売りなので、お客様を待たせず暗算で精算するのが、知らず知らずに身に付いたようです。

煎餅屋は米を大量に使用するので学友からも米を仕入れていました。1斗（約15キロ）1千円で買い付けますが、数量は目分量で持ってくるので実際には1斗2升から1斗3升あり、その差額が私の儲けでした。5月になると田植休みが有り、郡是（グンゼ）で蚕の餌やりのアルバイトです。朝4時から夜12時まで日当300円、9日間やって3千円の給料。当時の高校生の賃金が1日8時間で150円の時ですから、アルバイトとしては良い小遣い稼ぎでした。

又、日本化工の公害で村上、瀬波、下渡、羽下ケ渕の蚕が全滅し、桑の買い付けの手伝いで、桑川や岩崩辺りまで行った事もあります。

学校の売店では三角パン15円、牛乳10円を買ったり、近くのスナックではネコマンマ（丼飯に鰹節をたっぷり）15円を食べたり、本当に旨かった。

暇を見つけては、三面川で鮎釣りをしたり、海で泳いだり、クラス全員が笹川でキャンプした事も良い思い出となっています。

修学旅行は、米の収穫が終わった後の10月に3、4年生合同で京都、奈良、名古屋、東京と回ってきました。昔は、中学を出ると大人扱いで、酒もタバコも現在とは違っていましたので、自由時間には行った先々のバーでカクテルなど飲んできたものです。引率の先生達も旅館でグデングデン。東京では予約していたはずの旅館（上野）が受けていないとのハプニングに会い、開いている旅館（本郷）を探し、その旅館（上野～本郷）まで歩いて行ったものです。大変楽しい旅行でした。入学時50数名もいた生徒が卒業時は26名になっていました。

今でも当時の楽しかった高校時代を夢にみます。

学校へ行ける喜び、学校へ行けない悔しさを今の高校生に考えてほしい。（千葉・千葉市美浜区在住）

NHK大河ドラマ「天地人」で注目

開創六百年の古刹
耕雲寺（村上市門前）

「天地人」に直江兼続が幼少期、勉学に励んだ「雲洞庵」が出てくることで、同じ曹洞宗、門前の耕雲寺が注目をあびている。

開創六〇〇年、越後曹洞宗四箇之道場のひとつとして知られる霊樹山・耕雲寺は応永元年（一三九四年）楠木一族の傑堂和尚によって創設された名刹。最盛期には関東、東北、北信に末寺八十のほか孫末寺など千を越える系統寺を持ち、境内には開山堂、禅堂、衆寮、庫院、廻廊など七伽藍が立ち並び、百名もの雲水が勉学修業に励み、門風大いに栄えた。

寺史によれば、開祖傑堂（第二世）は南北朝時代湊川の戦いに破れた楠木正成の四男正儀の嫡男正能。祖父の遺志を継ぎ南朝再興をめざしたが、戦場で流矢にあたり左膝を負傷して武門の道を断念。福井の龍沢寺で仏門に入り、傑堂能勝和尚となって諸国行脚の後、地元豪族の招きにより杠沢の地（ゆずりさわ・門前）に庵を結んだのが開山の始めといわれている。傑堂の徳風は多くの人を集め、上田の庄で雲洞庵を開いた顕窓はその薫陶を受けた弟子の一人。因みに越後四箇之道場とは、中蒲村松の慈光寺、西蒲石瀬の種月寺、南魚沼上田の雲洞庵と村上の耕雲寺のこと。なかでも耕雲寺は第一の地位を占めた。慢幕や瓦には菊水の紋章が入り、江戸幕府は十万石の国持大名並みの待遇を与え、歴代村上藩主も寺領を付与、破格の処遇をしたという。明治十九年十二月大火で全伽藍を焼失、その後長く荒れたままとなっていたが、昭和二十三年山門、本堂を、昭和四十年には開山堂を再建。威風辺りを払う山門は創建往時の面影をとどめている。

毎年九月六、七日には開山忌が行われ、村の神楽とも併せ境内には老若男女が集い、やぐらの下で太鼓の音で踊り続けるほか、僧侶の勤行、祈祷大般若などが行われる。また、境内後方には樹齢六百年、樹高三十㍍、幹周り五㍍の大モミの木、樹齢三百年、枝が下方へ伸びる逆さ杉、樹齢二百年の千本杉などがある。

国道七号線から県道を東に七キロ、門前部落丘陵の中腹に山門が見えてくる。

平成20年度維持会費拠出者（順不同　敬称略）平成21年3月20日現在

旧34回　平山　譲
34回　井伊　哲郎
36回　大平　金一
39回　近　直司
40回　小川　景士
　　小田　周平
　　富樫　利男
　　渡辺　功
41回　長谷川和夫
42回　岩間　昌昭
　　斎藤　一郎
　　稲垣嘉一郎
43回　岡本　昭三
44回　海田　司郎
　　長郷　健三
　　長郷　邦男
46回　船山　泰三
　　奥村　有功
　　近　五郎
新1回　木村　一昭
1回　菊池　武
2回　小野利恵治
　　川上　孝
　　寺井　明夫
　　本間　正英
　　横田　謙輔
　　小野　正夫
3回　田中　照浩
　　渡辺　陽喜
　　佐藤　尚生
　　遠山徳四郎
　　佐野　清廣
　　富樫　栄一
　　小田　正二
　　星野　利男
　　斎藤　奎二
4回　村川　赳
　　大竹　茂久
　　川村　正
5回　佐藤　誠
　　村上　瓔子
　　佐藤　セキ
　　藤田　桂
　　青木　新一
　　湯浅　慶子
　　稲葉　五郎
　　篠木　幸雄
　　宗村　承子
　　櫻井久美子
　　小田　勝四
　　渡邊　明犬
　　渡辺　晋
　　和泉　義隆
　　本間　昭彦
　　佐藤　祐郎

5回　大西　保子
　　山田　學
　　横山　芳男
　　菅　一郎
　　永原　正子
　　渡辺　孝教
　　飯沼　孝
　　青木恵美子
6回　小野　裕子
　　野中千枝子
　　山田　敏雄
　　外門　功
　　泉原　富子
　　岩倉　宏之
　　大平　悦子
　　松田　順子
　　乾　良雄
　　荒木　廣
　　佐藤　修三
　　大平　恵吾
　　斎藤　晴也
7回　本間　岩雄
　　小林　順次
　　中村　泰而
　　斎藤　實
　　林　節子
　　水野　貞
　　佐藤　守
　　内山　安蔵
　　石本　保子
8回　宮坂　久子
　　市岡　貞雄
　　岡田英美子
　　山口　捷平
　　押切　助衛
　　八藤後剛輔
　　佐藤　タエ
　　根岸みのり
　　伊与部国男
　　大滝　正次
　　内山　勤三
　　木藤　克子
　　本間　次郎
　　赤見　市郎
　　板垣　三知
　　鈴木　良彦
　　中野　菊栄
　　風間　隆治
　　星野　昌夫
　　渋谷　善計
　　合田　功子
　　宮本　哲夫
　　川崎　昇
　　高橋　正
　　佐藤　彊介

8回　小形　庸
　　小池　悟朗
9回　宮部　博明
　　三浦　誠治
　　本間　正英
　　中山　敏彦
　　佐藤　雪子
　　関根　洋子
　　吉村美枝子
　　稲垣　伸夫
　　中村　宏
　　八藤後栄祐
　　河内　勝彦
　　小田　忠夫
　　齋藤　吾郎
　　本間　勝治
　　笠原　淳子
　　平井　俊雄
　　鈴木　亮
　　江藤由紀子
　　鈴木　恭子
　　佐竹　英章
　　小川　稲子
　　宮本セツ子
10回　和田　久夫
　　小野　安雄
　　小林　ミチ
　　岸野　洋
　　中村　四郎
　　亀井　興
　　長谷川康夫
　　飯沼　敏夫
　　横山　恭子
11回　古川　宏
　　町田　信
　　小薬　晃
　　佐藤　清
　　小田　征夫
　　相馬　義嗣
　　稲葉　興武
　　大矢　英男
12回　萩田こうこ
　　山本弥栄子
　　小林　正子
　　渡辺　慶子
　　大倉　義博
　　山賀　隆次
　　齋藤　紘
　　山脇　昂
　　佐藤　訓子
　　山宮　イツ
　　伊藤　正勝
　　野口　春樹
　　当摩　幸彦
　　石川　時子

12回　高橋アツコ
　　月居　洋子
　　服部智恵子
13回　大滝　修
　　磯部　正男
　　小林　繁
　　渡辺　輝男
　　渡辺　泰輔
　　前田　洋二
　　阿部　宣英
　　高橋　翼
　　前田　寛郎
　　中山　英夫
　　八幡　誠
　　板垣　成也
　　菅原　明
　　小野　繁
　　菅井　眞人
　　伊藤　衛
　　佐藤　建夫
　　笠　国雄
14回　松永　純子
　　大滝　文男
　　大庭　貞子
　　早川　玖子
　　菅　靖夫
　　細野　勲
　　福薗　ヨウ
　　佐藤　勝
　　井田　笙子
　　黒岩　紘子
　　菅原　勲
　　菊池　秀雄
　　磯部　哲也
　　目黒　満
　　清野　勝子
　　斎藤　攻
　　渡邉　正
　　土肥　直子
15回　本間　道子
　　佐藤　晴夫
　　伊藤満紀子
　　松澤　正
　　尾崎　茂
　　本間　隆子
　　小薬　稔
　　志賀　肇
　　益田　洋子
　　鈴木　康夫
　　角替　キヨ
　　明前　寿一
　　寺井　賢二
　　鈴木　和代
　　田中　ヒロ
　　鈴木益良雄

15回　青山　光夫
　　本保　銀二
　　田中　敏博
　　小田　洋雄
　　小田　毘古
16回　中尾　琼子
　　遠藤　久子
　　碓井　憲一
　　鈴木　愈
　　増村　正二
　　二宮　照子
　　石川　淑子
　　中山　国男
　　菊地　司郎
　　和田　洋美
　　大坪　信武
　　佐藤　三男
　　小池　登
17回　市川　房子
　　倉崎テル子
　　山本　宏平
　　伊与部　健
　　太田　直也
　　本間　保
　　児玉　正弘
　　永田　實
　　宮本久美子
　　富樫　芳次
　　若穂　囲勇
　　田所　和子
　　小池正一郎
　　品沢美代子
　　宮　絢子
　　安井八重子
　　青木　瑞江
　　西村　正
　　稲垣　常夫
　　服部　芳朗
　　三科　禮三
18回　小堀紗智子
　　緒方　光彦
　　鈴木久美子
　　福元　公子
　　金田　昭子
　　篠原　広子
　　平山　謙
　　佐藤　せつ
　　佐藤　志郎
　　海沼　昌子
　　佐藤　敦子
　　中村　和憲
　　中村　長平
　　濵中　壽子
　　相馬　喜春
　　高橋　繁夫

18回　五十嵐信夫
19回　河口富美子
　　長坂三重子
　　坂中　良子
　　渡辺　哲朗
　　高橋　賢司
　　安冨　成良
　　美濃部千恵子
　　井上ミヤコ
　　秋山　芳行
　　片岡　菊江
　　佐藤　昭二
　　山下　治郎
　　山本　文忠
　　成岡　茂
20回　中村　謹一
　　大平　達雄
　　工藤　哲雄
　　渡辺　峰男
　　平山　恵美
　　畠山千重子
　　加藤　正己
　　太田　春夫
　　佐久間啓子
　　前川満壽美
　　肥本　久子
　　富野　竹子
　　中村加和子
　　阿部美保子
　　齋藤　満男
　　新沼たず子
　　尾上　啓子
　　本間　廣
　　鈴木　陽二
　　志田　裕
　　高崎　慶一
　　本間多喜夫
　　佐藤　方直
　　山田　真吾
　　羽深　大三
21回　飛田　芳子
　　伊藤マユ子
　　久保喜代子
　　平野　陽子
　　斎藤　善二
　　松坂　町子
　　斎藤　勇一
　　辻　薫
　　田原　彰子
　　清水　正幸
　　中村　金男
　　岡見みさ子
　　衛藤　泰子
　　小川　勲
　　瀬下　江二

21回　吉田恵美子
　　山崎　久男
　　難波　光子
　　萩原美津枝
　　小川　幸子
　　川上　幸男
　　遠藤きみ子
　　市井　義久
　　新野　正治
　　高橋　美徳
　　寺井　克為
　　中村　修平
22回　小池　博幸
　　鈴木　弥生
　　八藤後　稔
　　安藤とし子
　　八藤後和行
　　北岡　亮子
　　佐藤　裕治
　　宮本　和子
23回　鳥屋　栄二
24回　七海　陽子
25回　富樫三子夫
　　森井眞由美
26回　貝沼　実
　　高田　眞一
27回　木村百合子
　　石栗　忠彦
　　久保田圭子
28回　小川　友子
29回　本間　徹
　　山本　和代
　　中村　英之
30回　相馬　章
　　小田　徹
　　中村　好
　　丹田　安夫
　　永田　正喜
31回　本間恵美子
32回　山田高子
33回　鈴木健一
34回　篠崎　泉
35回　唐戸　悦子
36回　佐藤利枝子
50回　稲葉　和寿
定11回　立花　俊道
　　本間　健志
　　細井ミツ子
　　小林　正明

村高関東支部役員一覧

名誉会長	小川	景士	旧40回
顧問	長郷	邦男	旧44回
	渡辺	孝教	新５回
会長	本間	勝治	新９回
副会長	木藤	克子	新８回
	鈴木	亮	新９回
	小野	安雄	新10回
	佐藤	勝	新14回
	山本	宏平	新17回
事務局長	長谷川	康夫	新10回
会計監査	川村	正	新４回
	菅井	眞人	新13回
幹事	大平	金一	旧36回
	鈴木	喜一	旧39回
	富樫	利男	旧40回
	岩間	昌昭	旧42回
	近	五郎	旧46回
	船山	泰三	旧46回
	木村	一昭	新１回
	川上	孝	新２回
	小田	正二	新３回
	村川	赳	新４回
	湯浅	慶子	新５回
	中野	素子	新６回
	野中千枝子		新６回
	荒木	廣	新６回
	齋藤	實	新７回
	林	節子	新７回
	市岡	貞雄	新８回
	中野	菊栄	新８回
	小池	悟朗	新８回
	関根	洋子	新９回
	小林	ミチ	新10回
	伊藤	衛	新13回
	小野	繁	新13回
	板垣	成也	新13回
	黒岩	紘子	新14回
	尾崎	茂	新15回
	川村	稔	新16回
	田所	和子	新17回
	本間	保	新17回
	濵中	壽子	新18回
	山下	治郎	新19回
	秋山	芳行	新19回
	志田	裕	新20回
	山田	真吾	新20回
	平山	恵美	新20回
	中村	修平	新21回
	瀬下	江二	新21回
	斉藤	勇一	新21回
	八藤俊和	行	新22回
	美濃	忠三	新22回
	鳥屋	栄二	新23回
	永井	賢吉	新26回
	中村	英之	新29回
	相馬	章	新30回
	丹田	安夫	新30回
	本間美恵子		新31回
	篠崎	泉	新34回
	前田	格	新36回

（平成21年３月20日現在）

●維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様に年間１口（２千円）以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜り、ありがとうございました。本年度もよろしくお願い申し上げます。

「村高」同窓会関東支部ＨＰ
http : //www.murakou.com/~kanto/